

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 18

August, 2009

関西大学ニューズレター
発行日：2009年(平成21年)8月25日
発行：関西大学 広報室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
<http://www.kansai-u.ac.jp/>



- リーダーズ・ナウ ー5
在學生— 文学研究科 博士課程前期課程 総合人文学専攻 服部 道子さん
卒業生— お笑い芸人「南海キャンディーズ」 山里 亮太さん
- 研究最前線
現代社会に適したグリーン・カウンセリングの啓蒙
遺族を支援する心理療法の確立を目指す ー7
社会学部 社会学科 — 富田 拓郎 准教授
ナノスケールの切削加工機開発に向けて
直動型静電マイクロアクチュエーターの
高出力化に挑戦 ー9
システム理工学部 — 山口 智実 教授
- トピックス [学内情報]
来春、高槻ミューズキャンパス開設
新たな世界を切り拓く
「考動力」を備えた人間を育てる ー11
- 社会貢献・連携事業 / 大学連携 / 地域連携 ー13
平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択
平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラムに採択
- 関大ニュース ー15
新学長 楠見晴重教授、第40代学長に選出 ほか

■対談
山田 洋次 (映画監督) × 河田 悌一 (学長)

言葉でイメージを豊かに膨らませる

厄介で困った人間を許容する、寛容な心が大事

YAMAMADA

YOKOJI

■対談

言葉で
イメージを豊かに
膨らませる

厄介で困った人間を許容する、
寛容な心が大事

●山田 洋次 ・映画監督

●河田 悌一 ・学長

河田学長のかねて依頼していた対談が、実現した。
山田洋次監督は、国民的映画といわれた
『男はつらいよ』全48作のあと
話題作を次々に世に送り出している、日本映画界の第一人者。
スクリーンからしみじみ伝わってくる温かさ、
人間と社会を見つめる確かなまなざしは、どこから来るのだろうか。
2005年から関西大学客員教授を務められている山田監督の話をお聞きしよう。

◆少年時代を過ごした「アカシアの大連」

河田 山田洋次監督と初めてお会いしたのは、1992年9月に大連で開催された日中国交回復20周年記念のシンポジウムの際でした。その際、作家の陳舜臣さんと一緒に、大連の街をあちこち案内していただきました。というのも、山田先生のお父さんが満鉄(南満州鉄道株式会社)の技術者で、ご自身も少年時代を大連で過ごされたからです。あのとき、旧居の懐かしい建物が残っていて、通された部屋に入るなり、「ここは僕の兄の部屋だった」とおっしゃいましたね。

山田 あのところまでは古い街並みが残っていて、昔の面影がありましたね。僕の家も傷んではいたけれど、ドアのノブを握った感触が50年前と同じでした。それから中国はものすごい勢いで変化したから、その後もう一度訪れたときには、あの家は解体中で廃墟みたいでした。

「アカシアの大連」と呼ばれたように、植民地の時代はきれいな街でした。5月には真っ白な花が街中に咲き乱れ、いいにおいが街中に漂うんです。花を口に含むと甘くてね、よくつぶらにして食べました。

河田 そのような暮らしも、敗戦とともに一変したのですね。

山田 貯金も株も何もかも消えたんですからね。僕たち日本人は持っているものを中国人やソ連の軍人に売って食いつなぐばかりありませんでした。僕と兄は、知り合いの大学の先生が所蔵していた本を預かり、道端に並べて売ってそのマージンをもらう、というようなアルバイトもしました。あるとき、中年のおじさんに「この本いくらで売れるの?」と聞かれて、「10円でいいです」と答えたところ、「君、これは『溇東綺譚』の初版本で、たいへん値打ちのあるものなんだ。そんな値段で売っちゃだめだよ」と言われました。永井荷風の有名な小説であることも、初版本に価値があることも、中学2年の僕は初めて知ったんです。残念ながら、その人は買ってくれませんでしたけどね(笑)。

◆記録し続け、語り継ぐべき「歴史」

山田 敗戦2年目の冬でした。引き揚げ船に乗って大連の港を離れるとき、ソ連の将校が一人、雪の降る岸壁で手を振って見送ってくれたんだけど、デッキの日本人は今までベコベコしていたのに、声高に「ばかやろう、今度会ったらただじゃおかないぞ」などと、悪口を浴びせていました。ところが、博多に着いたら岸壁にアメリカの兵隊がずらっと並んでいる。アメリカ兵はソ連兵よりうんとスマートでカッコよく、圧倒されました。その冷たい目を見ていると、ソ連のやぼったくて人なつこい兵隊たちが懐か

しくなったりして…。僕たちは大きなリュックをかついだ、言ってみれば難民ですからね。この国でも、また大変な暮らしが待っているんだなあとがっかりしたものです。事実、そうでしたものね。
河田 吉永小百合さん主演の新作「母べえ」は、今の学生には暗い時代の陰気な話のような印象を与えるようです。しかし、戦中・戦後に苦労された、監督の体験がこういう映画を作らせた、つまり思い残すことなく、気持ちのうえでもきちっと整理し、若い世代に伝えておかなければならないと思われたからではないでしょうか。
山田 僕らの少年時代、日本人は中国人を差別し、劣る民族として見ていました。なんていうひどいことをしたんだという負い目が、僕にはあります。その現実を臨場感をもって語れるのは、僕たちが最後の世代でしょう。歴史をさかのぼれば、日本人は中国の文化の恩恵を受け、その文化圏の中にいるわけですものね。江戸時代の侍は、みんな中国の本を読んで勉強したのでしょうか。
河田 江戸時代の人たちの教養のものは、四書五経を中心とする儒教でしたからね。日本人は歴史を忘れ去り、過去を水に流そうとしがちですが、中国人にとって歴史というのは、記録し続け、語り継がれるべきものです。そういう歴史観の違いを抜きにして、中国の悪いことばかりをあげつらう昨今の風潮は残念な気がします。

◆作り手の思いがスクリーンからにおう

河田 2005年に関西大学へ集中講義に来てくださったときは、日本映画だけでなく、世界の映画の歴史を踏まえ、チャップリンの名作をはじめ、いわゆる名画をさまざまな角度から解説していただき、院生諸君は感激していました。

山田 学生はみんな熱心で、とても授業のしがいがありました。映画の歴史は100年を超えていて、素晴らしい映画がいっぱいあります。それを若い人があまり観る機会がない、というか観ようとしません。映画のクラシックも歌舞伎や文楽と同じで、いい案内人がいると、どんなふうにも面白いのかが理解できる。これは何を意味しているか、どこが見どころなのかを教えられるうちに面白くなっていく。第二次大戦から戦後にかけて、日本人が食べるものも着るものもなくして飢えに泣いていた1940年代に、アメリカ映画はすごい傑作を作っていたことなども分かります。

河田 「文は人なり」と申しますが、文章も映画も同じです。いい映画には、作った人の思いが込められているのを感じます。

山田 一生懸命に作ると、作り手のその思いが画面に漂うのです。スタッフ全員の情熱が、スクリーンからにおう。そういうことを信じなければ、映画は作れません。真剣に作れば、観客に必ず伝わる。

河田 去年の3月、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学で、本学の日本・EU研究センターによるJapan Weekの行事の一環として、監督の『たそがれ清兵衛』など藤沢周平原作の三部作を3日間にわたり上映しました。監督にも参加していただいて、向こうの映画評論家との対談も行いました。500人ぐらいのホールが満席になり、皆さん笑うべきところではちゃんと笑うし、泣くべきところではちゃんと泣くし、最後は立ち上がって大きな拍手。いい映画というのは、国や民族を超えて理解されるものだと思います。

■対談

◆優れた人が愚か者を演じるおかしさ

河田 山田監督といえば、何と言っても「男はつらいよ」。48作に及ぶという驚異的な人気映画でした。シリーズの最後の舞台が阪神・淡路大震災直後の神戸で、主演の渥美清さんはがんが転移してドクターストップがかかっているにもかかわらず、無理を押し出て出演なさったと聞いています。監督にとって、渥美清という俳優さんはどのような方だったのですか。

山田 渥美清さんは、実に優れた人でした。観察力、表現力、論理的な頭脳、柔軟な感性の持ち主、記憶力もすごかったですね。シナリオは全部、暗記していました。あの人がいたから寅さんシリーズが出来たんです。寅さんを演じているこの人は実はすごく頭が良く、優しく人間に対する深い理解力と洞察力があるんだということを、観客は分かるんですよ。優れた人が愚か者を演じ、美人に恋をしてオロオロしたりするから、あんなにおかしかったのではないのでしょうか。

私生活では自分の家に人を呼ぶことは一切せず、スターとして、公人としての渥美清とは徹底して分けていた。最も身近にいた僕でさえ、あの人が亡くなって初めて奥さんと会話を交わしたくらいです。「渥美清の家内です」という電話があり、「昨日息を引き取りました」と告げられました。「家族だけで密葬し、それから山田監督に電話して、よろしくお願いしますと言いなさい」という話になっていたようです。僕が家に伺ったときには、骨壺とお線香の香炉があるだけで、何と徹底した人なんだらうと、僕は呆然としたものです。

◆次作は賢いお姉さんと愚かな弟の物語

河田 来年1月に劇場公開される小百合さんと鶴瓶さん共演の『おとうと』は、山田監督にとって10年ぶりの現代劇だとか……。

山田 寅さんシリーズが愚かな兄と賢い妹という組み合わせだったのに対して、今度は賢いお姉さんと愚かな弟の、おかしくて哀しい物語です。吉永小百合さんのお姉さんにさんざん迷惑をかけた笑福亭鶴瓶さんの弟が、行き場のないホームレスの人たちに最期を提供する一種のホスピスで亡くなるシーンが山場です。お姉さんの娘を蒼井優さんが演じ、セブな男との結婚に失敗し、加瀬亮さんが演じる幼なじみの大工の青年と結ばれる話もからみ、ワーキングプアといわれる人たちも登場します。

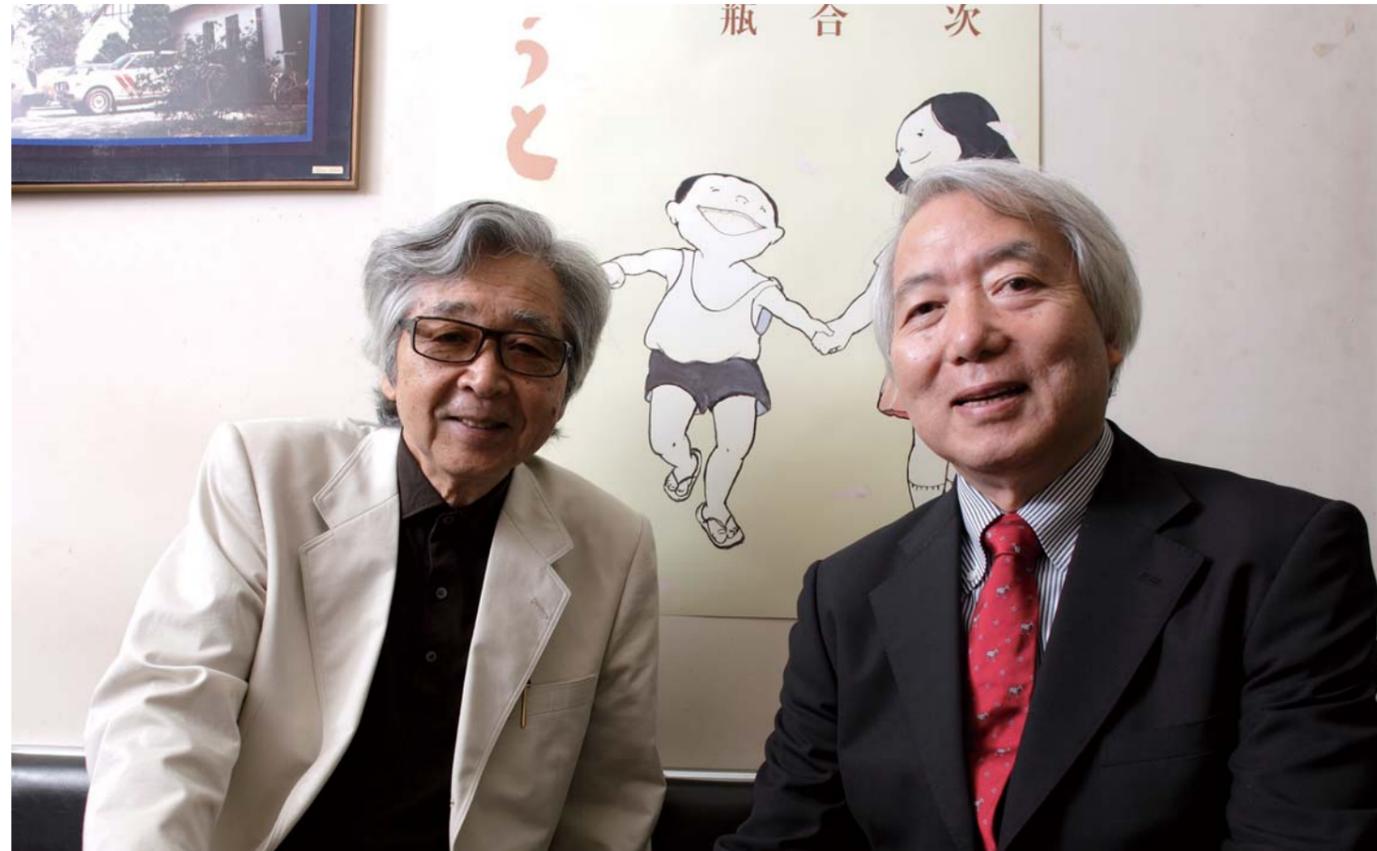
今は見て見ぬふりの、冷たい社会になりつつあります。世界では戦争が続いていて悲惨な死に方をしているお母さんや子どもたちがいるし、日本の国内でも毎年、自殺者が3万人を超えています。自分の国だけ、自分の家だけ幸せになればいいという考え方を直すきっかけになればいいと思っています。

河田 希望とか、ほのぼのとした気持ちというメッセージが、山田監督の作品には一貫して込められているのを感じます。

山田 「ああ、困ったやつだな」という人間が地域や家族には常にいる。でもやっぱり彼あるいは彼女も家族の一人、地域の住民の一人、あるいは学校の生徒の一人だと受け止めて許容するというような、寛容な気持ちが今の日本に欠けている。一緒にやっていくしかないなあという、あれが来ると問題が起

反対や非難があったり、わいわい言い合いながら、
どうにかこうにか話し合っ
て進んでいくというのが、
集団のあり方ではないかと思うのです。

「文は人なり」と申しますが、
文章も映画も同じです。
いい映画には、
作った人の思いが込められているのを感じます。



山田 洋次 (やまだ ようじ)
1931年大阪府生まれ。2歳から15歳まで旧満洲(中国東北地方)で過ごし、1947年に大連から日本に引き揚げ、山口県宇部市に住む。54年東京大学法学部卒業、松竹入社。助監督を務め、61年に「二階の他人」を初監督。「下町の太陽」、「馬鹿まるだし」などに続き、69年から95年まで渥美清主演の「男はつらいよ」シリーズ48作品を監督。他の代表作として「家族」、「故郷」、第1回日本アカデミー賞監督賞ほか6部門受賞の「幸福の黄色いハンカチ」、「息子」、「学校」など。2002年より藤沢周平原作の「たそがれ清兵衛」「隠し剣 鬼の爪」「武士の一分」、08年「母べえ」。96年紫綬褒章受章、04年文化功労者に選出。現在、関西大学客員教授。日本芸術院会員。「山田洋次作品集」(全8巻)など多数の著書がある。

河田 梯一 (かわた ていいち)
1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。大阪大学大学院で中国哲学を専攻。86年関西大学教授。文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。文部科学省中央教育審議会臨時委員。同省大学設置・学校法人審議会委員。社団法人日本私立大学連盟常務理事。財団法人大学基準協会副会長。独立行政法人日本学術振興会大学教育等推進事業委員会委員。著書に「中国近代思想と現代」「中国を見つめて」「書の風景」など。



「おとうと」(山田洋次監督・最新作)
監督：山田 洋次
主演：吉永 小百合、笑福亭 鶴瓶
©2010「おとうと」製作委員会
2010年1月全国公開



ベルギーのルーヴェン・カトリック大学で開催された山田監督作品の上映会と対談

きちゃうけど、しょうがないじゃないか、あれも仲間なんだからみたくない……。寅さんもそういう男です。人間というのは厄介な存在なんです。いつも穏やかに、全員一致で物事が進むわけじゃない。反対や非難があったり、わいわい言い合いながら、どうにかこうにか話し合っって進んでいくというのが、集団のあり方ではないかと思うのです。「一糸乱れず」というのは、むしろ良くない。

◆図書館で勉強する「美しい学生」であれ

河田 孔子のような偉人も、当時の弟子に苦言を呈したりしています。確かに今の学生には問題も多いけれど、彼ら、彼女らにはいいところがあるのです。例えば、人のために何かしたいというも思っている。だから、地震が起こったら被災地に駆けつける。高校や中学校の教員になるための介護実習などもきちんとやる。私たちの世代だったら高齢者施設で介助などできなかったと思いますが、今は若い男性の看護師も増えています。それぞれの時代、それぞれの良さがあるはず。それを伸ばしていきたいと考えています。

山田 監督は藤沢作品の前には、教育をテーマにした『学校』というシリーズをお撮りになっています。

山田 どんな先生に巡り合えるかで、一生が決まるんですよ。それほど先生の仕事というのは大事です。

河田 私はこの年になって、先生というのはなんといっても聖職だ、と思うようになりました。小中学校や高校の先生だけでなく、大学の先生もやっぱりある意味で聖職だと思います。

山田 何か悩みや相談ごとがあって教授のところへ行くと、カウンセラーに回されてしまうという話を聞いたことがあるけど、それじゃ何のために教授がいるか分からないじゃないですか。

河田 最後に、関西大学の学生に何か言葉を贈っていただけますか。

山田 僕はこの大学の図書館の立派さに驚きました。日本でも有数の大学図書館だそうですね。ルーヴェン・カトリック大学でもそうでしたが、図書館で学生が本を読んだり、調べたりしている姿を見ると、いいなあと思う。こっちまで幸せになりますね。広大な図書館を自分の書庫のように自由自在に利用できるわけですから、僕も学生時代に戻れてたっぷり時間があれば、朝から晩まで入り浸りになって勉強するのになあ。図書館で勉強する、美しい学生であってほしいと思います。本を読むことに夢中になるのは、とても大事なことです。

河田 本を読めば、考えないわけにはいきませんね。

山田 そして、イメージを豊かに膨らませることができるのです。イメージを作る映像の勉強は、まず文字で表現することが必要です。どんな映像かを、言葉で表してみる。言葉できちっと説明できない人は、的確な映像だって作れない。正確な言葉を使う訓練には、何とんでも活字を読むことが一番です。図書館を利用して、大いに本を読んでほしいですね。

河田 どうぞ自愛のうえ、これからも心にしみる素晴らしい映画を撮り続けていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

学ぶことは 生きること

難病を抱えながら、
文学部を卒業して大学院へ

◎文学研究科 博士課程前期課程 総合人文学専攻
服部 道子 さん

原発性肺高血圧症は、心臓や肺に特別な病気がないのに肺動脈圧が高くなる病気で、「特定疾患(難病)」に指定されている。中学卒業後、准看護師の資格を取り、1978年結婚、その後3人の子どもの育児、義父の介護を経て、服部さんは、この病気に罹って医師に「余命5年」と告げられた。しかし“同じ死ぬのなら夢をかなくてから”と進学を思い立ち、単位制・通信制高校を卒業後、関西大学に入学。見事に文学部を卒業し、さらに大学院で学びを深めようとする服部さんに、現在の心境を聞いた。



服部 道子—はっとり みちこ
■長崎県出身。2000年に原発性肺高血圧症を発病。05年、長尾谷高校(単位制・通信制高校)を卒業し、関西大学文学部に入學。09年春より大学院文学研究科で哲学を学ぶ。

服部さんは枚方市の自宅からおよそ2時間かけて電車で通学している。移動時には酸素マスクをつけ、ポンペを入れたキャリーバッグを引く。授業の前に、学舎にたどりつくのがまず大変だ。「坂道を上っている時は、こんなにしんどいことを何でやっているのだろうと思いますよ。でも、学ぶことは楽しい。だから坂の上で『楽』が待っていて、今はその前に『苦』を味わっている。そう考えるんです」

今年3月、関西大学文学部を卒業した。4月から大学院で哲学を学んでいる。卒業式での服部さんの晴れ姿は新聞等で大きく取り上げられ、話題になった。それ以来、取材されることが増え、修士論文の準備がなかなか進まないのが悩んだ。

論文のテーマはもう決めている。全国初の炭鉱じん肺訴訟となった「長崎北松じん肺訴訟(1979年提訴)」の原告副団長を務めた母親の生き方を考えてみたい。

何故そのテーマを選んだのか、と聞いてみた。「普通の主婦だった母が、父のじん肺症をきっかけに変わった。父亡き後長崎北松じん肺訴訟の原告団副団長を務め、16年



間聞っているうちに社会の問題点に気づき、生きる権利について考えるようになって、強くなったのだと思います。そういう母の生き方と、いま生きるために聞いている自分の生き方には、重なり合うものがあるのではないかと。ふたつの生に共通する“ほとばしる魂”の正体を解明したい、というのが研究動機です」

じん肺訴訟を理解するために、明治以降の炭鉱の歴史や労働史から学ぶことにした。自分自身の生について語った卒業論文に比べると、修士論文はより社会的広がりを持ったテーマに挑むことになる。

論文を指導するのは、ベルクソンなどのフランス哲学を軸に、日本哲学を含めて幅広い分野を専門とする木岡伸夫教授。ゼミには学部時代から参加している。「入学したころは心理学を学ぶつもりだったのですが、“学びの扉”という授業を通じて哲学の魅力を知りました。その時の先生の“出会い”と題した講義は、心に響くものがありました」

どうしても哲学専修で学びたくなり、“学びの扉”をコーディネートした三村尚彦教授に長文メールで自らの熱意をアピールした。「すると先生から即刻、“あなたが求めているものは哲学です。一緒に勉強しましょう”という返事が返ってきたんですよ」

そんな話をする服部さんは嬉しそうで、とても生き生きとしている。学ぶことの一番の魅力は?と聞くと「できた、という喜び。達成感です」という答が返ってきた。

「余命5年」と告げられてから9年が過ぎ、57歳になった。主治医には「病気の進行が遅い」と言われている。「なぜ元気でいられるのか、と不思議に思うこともあります。きっと勉強することが体に合っているのでしょうね」

読者へのメッセージは「絶対あきらめない」。近年医療の進歩はめざましく、よい治療薬も出てきた。

「どんなことがあっても、私はあきらめない。そのためにも、しっかり体調管理しています」

母校愛は永遠に! “おもしろい”と 言われ続ける人生が夢

最高に楽しかった大学時代の思い出と
同じテンションで話ができる毎を送りたい

◎お笑い芸人「南海キャンディーズ」
山里 亮太 さん —文学部教育学科 2001年卒業—

オカッパ頭と赤いメガネ、スカーフがトレードマークのお笑いコンビ「南海キャンディーズ」のツッコミ担当の“山ちゃん”こと山里亮太さん。今やテレビ、ラジオをはじめ数多くのレギュラー番組を抱える人気若手お笑い芸人として目ざましい活躍を



続け、コンビでの仕事はもとより最近では報道番組のキャスターにも挑戦するなど単独でも活躍している。硬軟自在の多才ぶりを発揮している山里さんに“大好きな関西大学”についてたっぷり語ってもらった。

山里さんは千葉県出身。何の縁もない関西に来ることになったのは“お笑い”をやるために吉本総合芸能学院(NSC)に入らなかったからというのは知られているところ。

「高校卒業と同時にNSCに入ろうと思って親に話をしたら『あなたと今まで一緒に過ごしてきたけれど面白いと思ったことがない。それなのにいきなり高校を出てやみくもに大阪に行くのは許せない』と大反対された。諦めるなんてできなかったので話し合いの結果、関西で10人が10人即答できる有名な大学に入れたら関西行きを許してやるとなって、探した結果が関西大学だったんです。パンフレットを見てさらにここでキャンパスライフを送ってみたいと猛烈に勉強しました」

1年間の浪人生活の後、念願の関西大学に合格。“お笑い”が最終の目標だったためその夢に少しでも多くのことが活かせるようにと文学部の教育心理学を専攻。寮で4年間を過ごした。それまで「実は人見知りで、人と目をみてしゃべるのも苦手。緊張するタイプだった」気質が4日間にわたるパンカラ気質あふれる“熱い歓迎”の入寮オリエンテーションで一転。「心配していた関西での生活の不安」も同時に消し飛んだ。

その後は大学生活を謳歌するという言葉通りの毎日。授業で楽しみサークルで楽しみ、イベントにも全力で取り組んできた。「当初2年間はお笑いを目指して来たことを忘れて大学生活を堪能していました。このまましっかり勉強をして教員免許も取っ



山里 亮太—やまと りょうた
■1977年、千葉県生まれ。千葉経済大学附属高等学校、関西大学文学部教育学科卒業。3年次生から吉本総合芸能学院(NSC)に通い、2003年に“しずちゃん”こと山崎静代さんとお笑いコンビ「南海キャンディーズ」を結成。2004年「ABCお笑いグランプリ」優秀新人賞ほか、多くの賞を受賞。テレビ、ラジオ等レギュラー多数。歌手の矢井田瞳さんとは同級生。著書に、「天才になりたい」(朝日新書)。

て面白い先生になっちゃおうかなんて思い始めた頃に、寮のOBから喝を入れられてNSCに願書を出したんです。この時の先輩からの後押しがなかったら“お笑い”はやっていなかったと思います。ゼミの山下栄一先生にも本当にお世話になりました。山下先生は『自分の夢を見つけてそれを一番大事にしながら学業を行っていけばいい』と僕の夢に対してとても寛容で、レポートでも心理学とお笑いを結びつけてくれたりして、僕の“お笑い”への夢というのは周りの人にすごく恵まれてきて叶ったように思います。これからの夢は『面白いと言われ続けること』と『楽しい毎日過ごすこと』です」

卒論は「笑いについて」。どうやれば笑いが起こるのかについて書いた。浪人時代の1年と大学2年間の3年間のお笑いブランク期間が幸いし、NSCでは黄金期といわれる22期生という強運の持ち主でもある。今はレギュラー番組も多数持つ売れっ子になり、先日は番組企画で母校ロケも行った。

「僕が一番ラッキーなのは夢に向かっていく過程が楽しかったところ。あとは目標を見つけていたこと。大学生活って自分で時間をコントロールできるから目標を持った時点で夢を叶えるために今何をやるのかという逆算ができるようになる。自分の目標に直結させていく作業に移せるのが大学生の醍醐味。そこにいかに遊びを組み込むかとか、その遊びを自分の目標にいかに関係させられるかってことを考える作業ができれば、こんなに充実した4年間はないというような毎日を過ごせます」

“大学愛”に満ちた先輩が後輩たちに熱いメッセージを残してくれた。

■研究最前線

現代社会に適したグリーフ・カウンセリングの啓蒙

遺族を支援する 心理療法の確立を目指す

悲嘆の心理学的援助法や、
青少年の反社会行動に対する介入技法を日本へ

◎社会学部 社会学科
富田 拓郎 准教授

心理学専攻の富田拓郎准教授は、かつて国立精神・神経センター精神保健研究所の科学技術特別研究員として、「子どもを亡くした親の調査」の中心となった人です。以来、死別体験と悲嘆に関する実証研究を行い、その心理学的援助法として近年では特に、「構成主義」を日本へ啓蒙することに力を注いでいます。また、公立中学のスクールカウンセラーの経験から、青少年の反社会行動に対する心理療法として、米国で開発されたMSTの導入などにも取り組んでいます。

■構成主義的な心理療法の啓蒙への取り組み

——「子どもを亡くした親の調査」について。
この研究では約170名のアンケート調査と約100名の面接を行いました。遺族にはからだの不調や離婚など、付随していろいろな経験が起こります。死別の経験を人に話し、悲しみ自体は癒えることはないけれど、前を向いて生きたい。そのきっかけにしたいからと話してくれた人が多いと感じました。SIDS(乳幼児突然死症候群)やインフルエンザ脳症はほんの数時間の出来事です。客観的に見ると親のせいではないのに、地方の風土として周囲から「あんたがもう少しちゃんと見ていれば」と攻められてしまうこともあります。子どもを亡くした親には強い自責感が伴い、それを抱えたまま暮らすので、周囲の人間関係がぎくしゃくします。あなたのせいではないと言われてそう思う人もいれば、なぐさめが言葉として入ってきても実感として伴



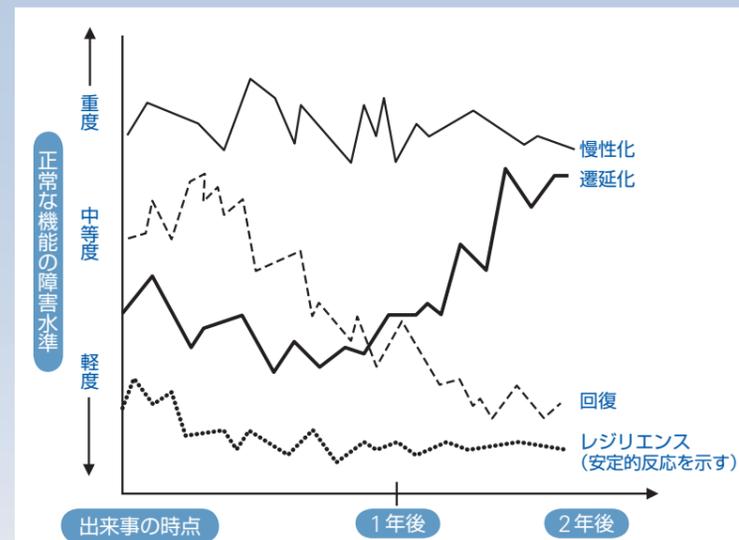
わない人もいます。これが死別に対する「悲嘆」の意味づけとなります。近年の研究で、専門家はこの意味づけが人によって異なることを認識したうえでアプローチし、面接しなければという考え方が強まってきました。

——それが構成主義的な心理療法なのですね。
そうです。米国の臨床心理学者ロバート・A・ニーマイヤーが、構成主義的世界的な権威です。啓蒙の意味をこめて、我々が彼のオリジナル本を抜粋して訳したものに『喪失と悲嘆の心理療法～構成主義からみた意味の探究』(ロバート・A・ニーマイヤー編・金剛出版)があります。ここに書かれているのは「喪失(死別)、悲嘆というものは一様に決まるものではなく、人によっていろいろな意味合いを持つものである」ということです。ある人にとっては絶望的であり、そこから得るレジリエンスから別の生き方を見つけていくという人もいます。編者によれば「悲しむことは、喪失が直面させた意味世界の再確認、あるいは再構成を必然的にもたらす」ということになり、「喪失によってこの世界の意味の再構成が生じる」という意味です。

——従来の心理療法とどこが違いますか？
従来の臨床は決められた理論枠の中で行われていましたが、構成主義はむしろ枠組みを作らず、面接では決まった定式的理論に縛られることなく、クライアントの認識論を重視します。そのうえで世界に対する意味づけをどう考えているのか、感じ方考え方を聞かせてもらい、そこから見えてくるものを知りたいという形で進めていきます。

——専門家の現状とこれからの展望は？

▼対人関係喪失体験、外傷体験後の正常機能混乱の典型的パターンの時系列変化 (Bonanno, 2008)



●このグラフは死別体験を経験した人々の不適応の度合い(障害水準)を示しています。一番上は「悲嘆が慢性化する人々」で、障害水準が常に高くなっています。2番目は「悲嘆が遅れてやってくる人々」で、時間経過とともに障害水準が徐々に高くなっています。3番目が「悲嘆が回復した人々」で、時間経過とともに障害水準が軽くなっています。一番下が「レジリエンスを経験する人々」と呼ばれます。レジリエンスとは辛い経験をして、人生を前向きに生きようとするパーソナリティ傾向で、これが高い人は辛くても肯定的で安定的な傾向を示しやすいです。こうした人々の場合は死別後も障害水準は常に低いという状態になっています。こうした結果から、死別体験をした後の反応にはさまざまなパターンがあり、決して一律ではないことが実証的に見てわかります。

日本ではこのような視点で臨床を行っている人が非常に少なく、専門家のアプローチとして「悲しみ」が一定のプロセスを経て解決に至るものという見方もあります。ある新聞記事に「あなたはもう2年経ったから、悲しみから回復するはずよ」と、臨床心理士による遺族の方へのコメントが紹介されていました。これにはがっかりしました。悲しみに期限などありません。「悲しみ」に対する意味づけは、まさに個人の選択です。ある人はそれを機に前へ前へと生きていこうとします。また、生きている価値もないと死の一手手前のような考え方を起こす人もいます。専門家には時期や段階にこだわってほしくありません。被害者支援、遺族支援が重視されている今の世の中で、死別への理解と知識のある臨床家を育て、それを高めつつ啓蒙活動を行うこともこれからの私の大きな仕事だと考えています。また、すべてのケースが構成主義に合うかどうか、まだ日本では検証されていないので、それを含めて自助グループなどと連携をとりながら、苦しんでいる人が前向きに生きていけるような支援をシステムとして動かしていくことをトータルに考えていきたいと思っています。

■青少年の反社会行動に対するMST(マルチシステムセラピー)の導入

——もうひとつの取り組みであるMSTとは？
米国サウスカロライナ医科大学のスコット・ヘンゲラー教授らが開発した青少年の暴力、破壊、非行、犯罪行動に対する心理学的介入技法で、問題行動を起こした本人の家族を中心に

様々な介入を行います。欧米諸国では、思春期の児童や青年期の反社会的行動への介入技法として最も知られた技法のひとつであり、科学的にも効果が実証されています。
——青少年における問題と導入による展望は？
近年、日本の学校現場で増加している問題として不登校、発達障害への対応、暴力行動などがあります。なかでも暴力は、不良仲間とのつながり、非行少年の夜間徘徊、家族の問題など要因が様々であり、トータルに扱える専門家が少ないのが現状です。また、少年犯罪の矯正処遇制度の問題もあります。法を犯した少年は少年院や少年刑務所に入ります。しかし、そこを出て現実社会に帰ったとき、好むと好まざるに関わらず、元のよくない家族、友達といったマイナスの環境に戻ってしまいます。結果的に何年かの矯正処遇は水の泡となるのです。日本で唯一機能している施設外処遇として保護観察制度がありますが、保護観察官ひとりで相当数のケースを担当するため、地域のボランティアである保護司が実際には少年と接することになります。本来であれば保護観察官と保護司の間を取り持ち、子どもに専門的知識を持ってアプローチしつつ、地域コーディネイトをする役割が必要ですが、こうした専門家は日本にほとんどいません。MSTのプログラム導入により、問題を抱える子どもに対し環境全体をターゲットとするアプローチが可能であると考えています。スタッフの育成や財政基盤の確保など課題も多いのですが、まずは啓蒙活動を続けることが重要と思っています。

●富田准教授の訳書
『喪失と悲嘆の心理療法』(写真左)
『児童・青年の反社会的行動に対するマルチシステムセラピー (MST)』
●富田准教授のことが書かれている本
『いのちって何だろう』



研究最前線

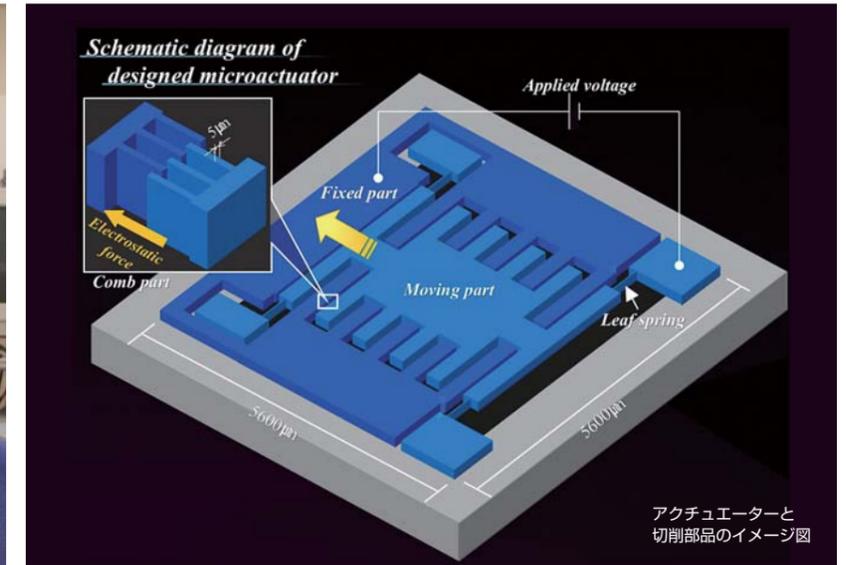
ナノスケールの切削加工機開発に向けて

直動型静電マイクロアクチュエーターの高出力化に挑戦

省エネルギー、低コストの電子デバイス部品製造への基盤技術

◎システム理工学部
山口 智実 教授

ナノテクノロジーは、情報、医療、エネルギーなどさまざまな分野において重要な基盤技術となっています。特にナノメートル(10億分の1メートル)単位の微細加工は、これからの省資源・低コスト型産業に欠かせない重要な技術であり、各方面から強い期待が寄せられています。ナノテクノロジーへの関心が高まる中、システム理工学部の山口智実教授は、マイクロ加工技術の開発に向けての研究に取り組んでいます。



アクチュエーターと切削部品のイメージ図

環境配慮型産業の発展を担うナノ加工技術

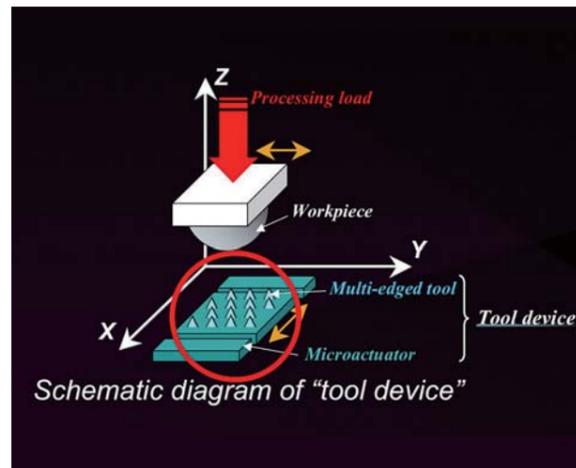
— ナノテックの中でも超小型の加工機の開発は、まだ実用化が進んでいないそうですね。

ナノテック分野では、光や圧力を測定するセンサ技術などすでにさまざまな分野で幅広く利用されていますが、素材に力を加えて、切ったり曲げたりする加工技術は、現在のところ実用の段階に達していません。しかし、巨大設備を使って大量に生産するという考えを改め、環境に負荷を与えない、資源のむだ遣いをしない、省スペースで必要な量だけを短時間で作ってほしいというこれからの産業のあるべき姿を考えると、マイクロマシンへのニーズはますます大きくなることは間違いありません。

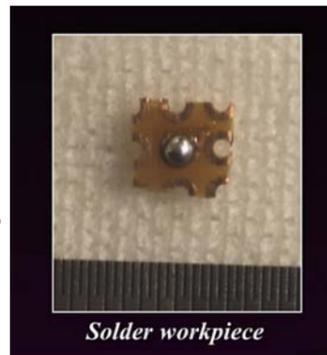
— 山口先生の微細加工技術についてご紹介ください。
私の研究室では、マイクロマシンの開発に欠かせないアクチュエーターの開発に取り組んでいます。アクチュエーターとは、電気などのエネルギーを与えると機械を動かす装置です。私たちは昨年アクチュエーターを作成し、動かされる側の機械の開発も行いました。それはナノメートルサイズの極小なヤスリのような切削部品でした。しかしこの部品を十分に稼働させるには、そのアクチュエーターでは全くパワーが足りなかったのです。そこで、原点に戻ってアクチュエーターの再設計を行いました。

— 今回開発されたアクチュエーターは、従来の試作品の120倍の出力を実現しましたね。

電気エネルギーを効率よく駆動力に変えるためのデザイン変更には頭を悩ませました。アクチュエーターには櫛の歯型をした部分があり、この歯を細くして数を多くすれば理論上効率が上がります。しかし櫛を細くせず歯を増やしてもアクチュエーターが大きくなるだけで、かえって逆効果になります。試行錯誤の結果完成した今回のデザインでは、歯の数が24倍となりました。従来型よりも90倍の大きさになったものの、120倍という

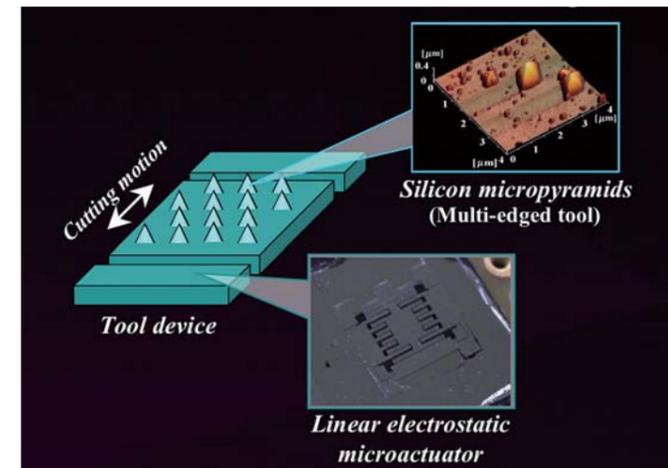


▲研究室で開発したマイクロマシンのしくみ。赤い丸の部分が今回開発したアクチュエーターと切削部品。ヤスリのように下から素材を削る

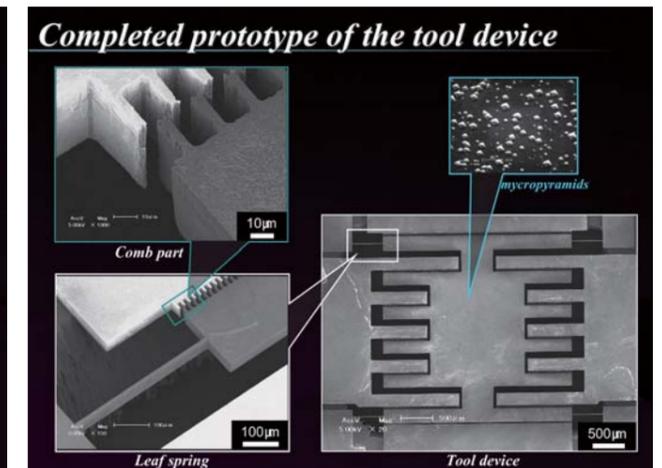


削られる素材(半球部分)。基板の大きさは一辺約3ミリメートル▶

大きな駆動力を実現し、切削部品を十分に動かすことができました。今回の研究からは、将来のマイクロマシン開発につながる貴重なノウハウが得られたと実感しています。今後はさらに高出力なアクチュエーターの開発に取り組むと考えています。



アクチュエーター(手前)と切削部品(突起部分)のイメージ図



アクチュエーターと切削部品の顕微鏡写真。実際の大きさは一辺が約5600マイクロメートル

DEVELOPMENT OF MESO-SIZED MACHINE WITH MICROACTUATOR AND MICROPYRAMIDS

未知の分野を切り開くのは、知識の蓄積と豊かな想像力

— マイクロマシンの研究で注意しているのはどんな点ですか？
小さいものに携わっているという認識をしっかり持つということですね。ナノスケールの世界では、静電気や材料表面の粘着力など、マクロスケールではあまり注意を払う必要のない要因も大きな影響を与えます。このような作用について理解を深めるにはしっかり知識を積み重ねていく努力と、可視化できない世界で「今、何が起きているのか」を視覚的にイメージする想

像力の両方が必要です。
— 研究の発展につながるアイデアはどうやって生み出されるのですか？
私はつねづね学生たちに「思いついたら、とにかくやってみよう」と言います。ナノテクノロジーに限らず素晴らしい発想は、挑戦と失敗を繰り返すことから生まれるものではないでしょうか。これからも、頭と体の両方を動かして新しいことに取り組んでいきたいと思っています。

来春、
高槻ミュージックキャンパス
開設

新たな世界を切り拓く 「考動力」を備えた人間を育てる

関西大学初等部・中等部・高等部、児童・生徒募集を開始(いずれも設置認可申請中)

2010年4月、関西大学はJR高槻駅前に「高槻ミュージックキャンパス」を開設します。新キャンパスでは本学初となる小学校をはじめ、中学校、高等学校、大学、大学院を設置し、同一キャンパス内での一貫教育を展開することになります。児童・生徒募集開始にあたり、開設準備を推進してきた米津俊司 中等部・高等部校長と田中明文 初等部校長(いずれも就任予定者)に話を聞きました。



●中等部・高等部 校長就任予定者
米津 俊司

●初等部 校長就任予定者
田中 明文



●初・中・高等部の教育目標

米津 関西大学の教育理念である「学の実化」に基づき、小中高一貫教育を通して「確かな学力」「国際理解力」「情感豊かな心」「健やかな体」という4つの力をバランスよく育て、高い倫理観と品格を兼ね備えた「高い人間力」のある人間を育てることをめざしています。国際理解力というのは、単に英語力をつけるというのではなく、異文化理解や他国の人と共に生きていける力をつけることであり、我が国の文化への理解を深めることも含まれています。ネイティブの外国人教師が体育や家庭科等の授業に入って教えるというダブル指導体制を導入するほか、キャンパス内に茶室を造り、茶道や礼儀作法も教育活動や部活動に取り入れます。子どもだけでなく、保護者も一緒に伝統文化に触れる機会を作りたいと考えています。

●カリキュラムの特色

米津 初・中・高等部を通しての教育の特色として、まず、「英語考動力を育む」ということがあげられます。初等部1年生から毎日15分のモジュール学習を取り入れ、3・4年生では3時間、5・6年生では4時間の英語学習を実施します。中等部では週7時間の英語授業で実践的な英語力を育て、高等部では将来にわたって役立つ専門的な力をつけます。また、海外の提携校との交流や英語合宿、海外英語研修なども計画しています。

2つ目は、発想、思考、表現力を高める「ICT教育」です。コンピュータの使用法を教えることが目的ではなく、表現やコミュ

●小中高一貫校設立の意義とメリット

米津 関西大学は123年の歴史と伝統がありますが、小学校だけがありませんでした。そこで、新たに小学校を設置し、21世紀の世界を切り拓く「考動力」のある人間を育てるために、小学校・中学校・高等学校・大学・大学院までの一拠点一貫教育を展開します。小中高一貫教育のメリットは大きく次の5点です。

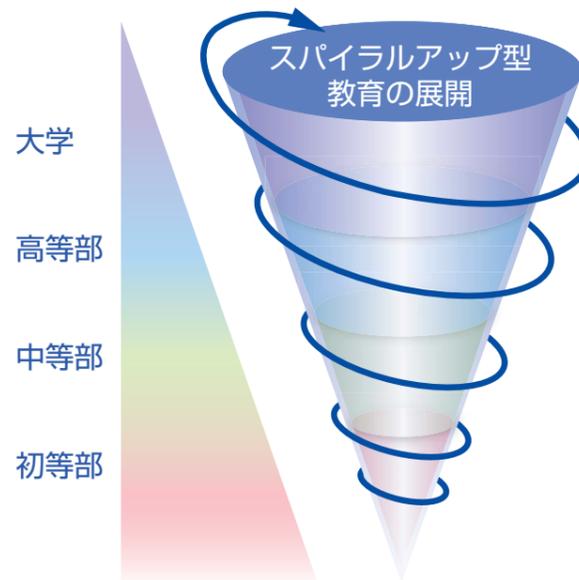
- ①入学者選抜の影響を受けず、幅広く深い学習ができる
- ②12年間を見通したカリキュラムを作成し、計画的・継続的な教育ができる
- ③継続して子どもの成長を見つめることで、個性や才能を発見しやすい
- ④異年齢・異校種との活動により、社会性や人間性を育てることができる
- ⑤初・中・高等部の先生が交流することにより、教育の質を高めることができる



「英語考動力」を育む初等部英語教室

ニケーション、学習のツールとして、様々な学習の中でインターネットやコンピュータを活用することが私たちの考えるICT教育であり、全国に先駆けた教育となります。

3つ目は、「高い思考力」を育てる教育です。各学校段階での接続ギャップのない「スパイラルアップ型教育」を導入し、内容を深めながら発達段階に応じて繰り返し学び、確かな学力を身につけます。12年を見据えたカリキュラムだからこそ、必要などころに十分なパワーを注ぐことができるのです。



●その他、特長的な取り組み

田中 他にはない取り組みとして、「e-Portfolio (電子ポートフォリオ)」の導入があります。子どもたち一人ひとりの活動や学習の記録、作品等を12年間を通し、データとして蓄積するのです。子どもたちは過去の自分の成績、読んだ本、レポート等すべてを振り返ることができます。また、教師は子どもたちを



高槻ミュージックキャンパス

深く知ることができ、生活指導や進路指導のツールとしても役立てます。

読書教育にも注力し、図書館に専門家を入れた12年間の読書指導の展開により、子どもたちに自らの読書生活を創造させます。また、ICTとの併用で、広い知識が得られるようになるでしょう。



読書生活を創造する図書館

米津 総合情報学部や地域と連携し、従来の教室での学びだけではなく、他校や地域社会などと共に学ぶ「ハイブリッド型教育」も実践します。例えば、地域の医療機関と連携しながら生命について学習し、安全問題に取り組みます。まわりには自然環境も整っているので、自然体験学習や環境学習にも取り組む予定です。

米津 新キャンパスにおける私たちの夢は「ファミリー」として子どもたちを育てることです。今の子どもは兄弟が少ないため、我慢する、分け与える、思いやりを持つ、優しくする…などの人間力の基本となる力が弱いように思います。だからこそ、一貫教育の中で縦の人間関係を大切にしたい。初等部生には少しだけ未来のモデルとして中等部生がいます。高等部生は初・中等部生にお手本とされることで責任感も培われるでしょう。教育とは、教師と子どもが互いに気持ちを共鳴し合い、子どもたちの「人を信じられる心」「生きる勇気」「自分に対する自信」等を育てながら、夢や希望を実現する力を養っていくことだと私は考えます。そして、私たちはそういう学校をめざしています。世界で活躍する心の豊かな人間を育てたいのです。

文部科学省プログラム

●平成21年度「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択
「医工薬連環科学」教育システムの構築と社会還元～分子から社会までの人間理解～

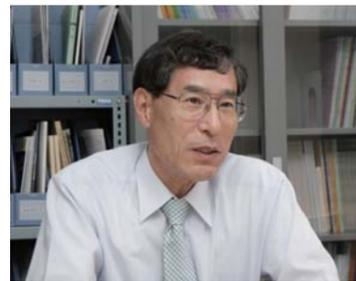
医・工・薬の専門分野の境界を超えた 人間中心の学習環境づくりをめざして

近年、医療・福祉分野への工学の貢献は著しいものがあります。機械工学分野では各種の医療用装置やロボットなどの研究開発が活発に進められ、また製薬工学が発達して、製薬研究の中核を担うようになりました。しかし、人体を対象とする医学とモノを対象としてきた工学との連携体制は十分でなく、本格的な医・工・薬学分野の連環を実現するためには融合した教育体系・研究基盤の構築が不可欠です。こうした社会的要請に応えるべく関西大学では数年前から「医工薬連環科学」の体系作りに取り組んできました。その中で教育システムの構築に関するプログラムが平成21年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択されました。医工薬各分野の相互理解を助ける教育カリキュラムを策定・実施するため、関西大学、大阪医科大学、大阪薬科大学の3大学が共同で「医工薬連環科学教育研究機構」を設置。高槻市など地域への社会貢献を含め、歴史のある3大学がチームを組んで、「人間理解」をキーワードに、生命への洞察力と実践的な問題解決力を育む新しい人材育成の拠点を形成していきます。



現場での問題解決力を育む「医工薬連環科学」

プログラムの特色



●化学生命工学部
生命・生物工学科
土戸 哲明 教授

本学では従来より大阪医科大学、大阪薬科大学と学術協定を締結し、医療・福祉などの分野で期待される総合的知識や幅広い理解力を育てるさまざまな連携事業を進めてきました。今回採択された本プログラムは、この連携をさらに発展させたものです。取り組みの基盤となる「医工薬連環科学」は、自然科学の幅広い分野を扱う生命科学の中で特に健康・医療に関わる医学・工学・薬学を融合し、3分野の協調によって医療や福祉の現場での問題解決を進めようという目的を持った学問体系です。従来の生命科学領域になかった医工薬連携の全国モデルづくりをめざし、取り組んでいきたいと思えます。

プログラムの概要



●システム理工学部
機械工学科
倉田 純一 准教授

この取り組みの事業期間は平成21～23年度ですが、現行カリキュラムに基づく共通科目の開設からスタートし、専門科目や実験実習科目、演習科目の開発ならびに新カリキュラムの策定、遠隔講義システムの整備など、教育支援ネットワークの充実も含めた教育環境の整備を推進していきます。また、高槻市内にキャンパスを持つ3大学の連携という好条件を活かし、高槻市の行政、地域コミュニティとも協力して小中高生との交流、市民公開講座などを実施し、学問の地域還元と地域での交流活動の強化に向けて積極的に取り組んでいく予定です。

●平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」学生支援推進プログラムに採択

景気に左右されない職業選択力を育む 関西大学キャリアサポート



●キャリアセンター事務局
吉原 健二 事務局長

関西大学では、将来の目標実現に向けて自律的に「考動」できる力を有した学生を育成するために、入学時からの導入教育、キャリア教育、インターンシップ、多様な就職活動支援など、段階的なキャリア形成支援を展開しています。

今回採択されたキャリアサポートプログラムは、平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に採択された「総合大学における標準型キャリア教育の展開～学生一人ひとりの勤労観・職業観を育む関西大学キャリア教育プログラム(K-CEP)～」の取り組みを延伸させた内容となっています。

具体的には、雇用環境が厳しい中でも、多くの企業や各種団体の協力のもと、学内企業セミナーや各界で活躍する卒業生との懇談会等の多彩なプログラムをダイナミックに開催して学生の就職活動を力強く支援します。さらには、従来のキャリアデザインルーム等での相談対応に加えて、キャリアセンター事務室内に専門相談員を配置して、学生一人ひとりに丁寧できめ細やかな相談・指導ができる体制を強化します。

■社会貢献・連携事業／地域連携

大阪市立大学・大阪府立大学と連携記念公開講座を実施

関西大学と大阪市立大学、大阪府立大学は、昨年11月6日、大阪都市圏に立地する大学としてより活発な相互交流を推進するため、幅広く連携を強化していくことに合意し、包括連携協定を締結した。その連携事業のひとつとして、7月18日に大阪市中央公会堂において三大学連携記念公開講座「水都大阪“汽水”文化の都市と暮らし」が開催された。基調講演は、建築家であり関西大学客員教授、東京大学名誉教授である安藤忠雄氏による「なにわの履歴書 汽水文化が生んだ都市と暮らし」について、関西大学の高橋隆博教授、大阪市立大学の谷直樹教授、大阪府立大学の橋爪紳也教授が論議を交わした。



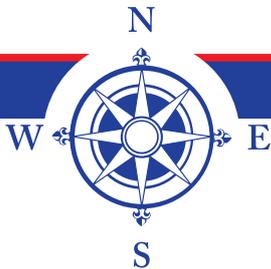
京都府城陽市と連携協力に関する協定を締結



関西大学と城陽市は、包括的な連携を行うことで合意に達し、7月17日に河田梯一学長、橋本昭男市長らが出席して調印式を行った。今後は、活力ある地域づくりと大学の活性化に寄与することを目的に連携協力することとしている。今回の連携協定は、関西大学が同市の地下水保全において「城陽市総合的な地盤及び地下水環境保全に関する調査」などの調査研究等に協力したことなどが契機となった。

大阪国学院と連携協力に関する協定を締結

関西大学は浪速中学・高校を運営する学校法人大阪国学院と連携協定を結び、6月9日に正式調印した。来年4月から浪速中学校に6年間の一貫教育を行う「関大クラス」を設け、学校名も「関西大学連携浪速中学校」に改称する。また浪速高校は従来の推薦枠を拡大し、入学前教育が受けられる高大接続パイロット校として高大連携教育を推進することとなる。



新学長決まる 楠見晴重教授、第40代学長に選出



楠見晴重 次期学長

7月29日、河田倅一学長の任期満了に伴い、次期学長を選出する学長選挙会が行われた。選挙権者は関西大学学長選挙規定第9条第4項の定めに基づき、現職かつ専任の教授、准教授、専任講師、助手および副手で、当日の有権者数は612人、投票者数は559。開票の結果、楠見晴重

教授が投票総数559票中、284票を獲得し、第40代の関西大学学長に選出された。任期は10月1日から3年間。

楠見教授は関西大学大学院を修了し、1982年関西大学工学部の助手として着任。専任講師、助教授を経て、2002年に教授就任。その後の工学部改編に伴い、2007年から環境都市工学部教授、同学部長を務める。2008年より理事を歴任。研究分野は地盤工学。

**高槻ミュージックキャンパス
 「初等部・中等部・高等部」児童・生徒募集開始**

2010年4月開校予定の『関西大学高槻ミュージックキャンパス』に設置される「関西大学初等部・中等部・高等部」(いずれも設置認可申請中)の児童・生徒募集概要が発表された。入試説明会は8月より順次開催中。



●詳細ウェブサイト
 [入試説明会]
<http://www.kansai-u.ac.jp/tnc/exam/index.html>
 [募集概要]
<http://www.kansai-u.ac.jp/tnc/exam/outline.html>
 ●お問い合わせ(月～金曜日 9:00～17:00)
 関西大学初等部開設準備室 TEL. 06-6368-1352
 関西大学中等部開設準備室 TEL. 06-6368-1423
 関西大学高等部開設準備室 TEL. 06-6368-1402

**ICISが東アジア文化交渉学会を創立
 CSACも国際シンポジウムを開催**

関西大学は文部科学省グローバルCOEプログラムの拠点である文化交渉学教育研究拠点(ICIS)が中心となって東アジア文化交渉学会を設立し、6月27日、千里山キャンパスで、創立総会ならびに記念講演会、第1回年次大会を開催した。テーマは「多元文化交渉への新しいアプローチ」。記念講演は文化庁長官の青木保氏、基調講演は国立台湾大学人文社会高等研究院院長の黄俊傑氏により行われた。

また、翌28日にはアジア文化交流研究センター(CSAC)第5回 国際シンポジウムを同キャンパスで開催。テーマは「東アジアにおける文化情報の発信と受容」、基調講演は本学の藤田高夫教授と松浦章教授により行われた。

この度の東アジア文化交渉学会創立にあたり、入江昭氏(ハーバード大学名誉教授・東アジア文化交渉学会顧問)、マーティン・コルカット氏(プリンストン大学教授・東アジア文化交渉学会理事)、フランシス・フクヤマ氏(ジョンズ・ホプキンス大学教授)、ウィリー・ヴァンドゥワラ氏(ルーヴェン・カトリック大学教授・CSAC研究員)の4氏に関西大学の名誉博士号を贈呈することが決定し、両日において贈呈式も行われた。



(左から) マーティン・コルカット氏、河田倅一学長、入江昭氏



(左から) フランシス・フクヤマ氏、河田倅一学長、ウィリー・ヴァンドゥワラ氏

**リクルート社『進学ブランド力調査2009』で
 関西圏第1位**

株式会社リクルート社が実施した『進学ブランド力調査2009』において、昨年に続き、関西大学が関西圏における「志願度」「知名度」の両ランキングで第1位となった。この調査は、関東・東海・関西エリア在住で2010年3月に卒業を予定している高校生74,000人を対象に行われ、関西圏における本学のブランド力の高さが示されることとなった。